

# 色彩とジェンダー

## ——ピンクと青を中心に——

八谷 省吾

本研究の出発点は、「ピンク＝女性」「青＝男性」という色分けが、ごく自然なものとして日常生活に浸透していることへの違和感である。幼少期から身の回りに存在するこの色彩とジェンダーの結びつきは、個人の好みとして扱われがちであるが、本当に生まれつきの感覚なのだろうかという疑問を持ったことが、本研究を行うきっかけとなった。

本論文では、ピンクと青を中心に、色彩とジェンダーがどのように結びつき、社会の中でどのように受け継がれてきたのかについて検討した。また、色と性別の関係を当然のものとして捉えるのではなく、歴史的・社会的な背景の中で形づくられてきたものとして捉え直す視点から考察を行った。

歴史的背景を検討すると、1900年以前の欧米社会では、子どもの衣服や持ち物に性別による色分けはほとんど見られず、現在のような固定的な対応関係は存在していなかったことが分かる。20世紀以降、とりわけ戦後のアメリカ社会において、性別役割分業の強化や消費社会の拡大を背景に、ピンクは女性、青は男性を象徴する色として商品や広告を通じて広く普及していった。この過程において、色彩は単なる視覚的要素ではなく、ジェンダー規範を内面化させる装置として機能してきたと考えられる。

さらに、子どもの色の嗜好やランドセルの購入色に関する調査データを分析すると、幼少期から男女差が確認され、成長とともにその差が強まる傾向が見られた。特に男子においてピンクを避ける傾向が顕著であり、色の選択が個人の自由な好みではなく、「男性らしさ」を維持するための社会的圧力として作用していることが示唆された。一方で、女子には比較的多様な色の選択が許容されており、ジェンダー規範の非対称性も浮き彫りとなった。

本研究を通じて、色彩とジェンダーの関係は自然なものではなく、社会や文化、商業的要因によって作り上げられてきたものであることが明らかになった。色に付与された意味を問い直すことは、ジェンダーに基づく固定観念を相対化し、多様な選択を認める社会を考えるための重要な手がかりとなる。色を理由に「男だから」「女だから」と選択を制限される状況を見直すことが、性別にとらわれず自分らしく生きることへとつながっていくのではないだろうかと感じた。